

R-PDCA サイクルの考え方に基づいた小学校における学級経営改善のための研修開発

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻
坂林毅昌

1. はじめに

小学校学習指導要領総則編で「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」と述べられているように、現代の日本の学校教育において学級経営はあらゆる活動の基盤となるものであり、重要なものとして位置づけられている。

一方で、白松（2017）は、学級経営は「学級における指導の総体」であるために、人によって学級経営のとらえが異なっていることを指摘している。また、教職課程コアカリキュラム（文部科学省,2017）では、教員養成課程における学級経営に関する学習到達目標について、「集団指導、個別指導の原理を理解している」と触れるに留まり、学級づくりや集団づくりなどの学級経営に直結する言葉は見当たらず、教員養成課程において、学級経営を学ぶ機会が乏しいことが推察される。

A小学校においては、学級経営に困難感を抱える教員が多いため、学校として、学級経営の改善が喫緊の課題であるが、前述の社会的背景に加え、「学級経営は個人の資質によるもの」という考え方が根強くあり、学級経営が改善しづらい状況にある。さらに、「教師1人に対し複数の児童」という日本特有の学級の形式が、学級を閉鎖的な空間としている現状もある。

学校全体で学級経営改善の必要性がありながらも、改善に向かわないこのような状況を打開していく必要がある。

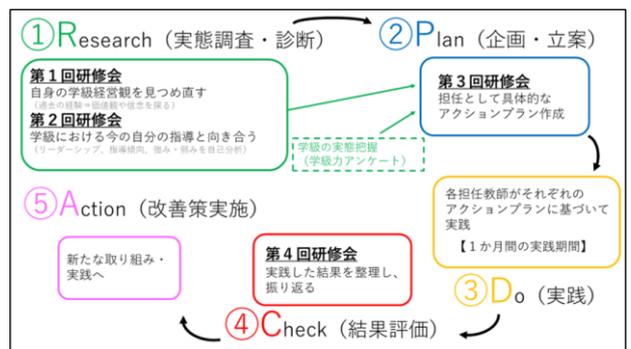
2. 研究目的

本研究の目的は「A小学校の各学級担任が、自身の指導観や担任としての自身の指導を客観視し、目指す学級像に近づけていくための方策を自ら考え、実践し、振り返るという学級経営における R-PDCA サイクルを自ら回していけるようにすることで、自身で学級経営の改善を図ることができるようにすること」である。

3. 課題解決の方法

学級経営において自ら課題を見つけ、自ら指導を改善していくことができるようにするために、R-PDCA サイクルの考え方に基づいて Research から Action に至るまでの活動を4回の研修会の中でデザインし、各担任教師

に学級経営における R-PDCA サイクルを回す経験をしてもらう。4回行う研修会の位置づけを【図1】に示す。学級経営における Research 段階を「自身の学級経営観を見つめ直すこと」「今の自分の学級における指導と向き合うこと」の2点に設定し、その2点と学級の実態を照らし合わせて、各担任教師がそれぞれ学級経営におけるアクションプランを作成する(Plan)。作成したアクションプランを実践し(Do)、振り返り(Check)、新たな実践(Action)へとつなげていく。



【図1 本研究の全体像】

4. 結果と考察

評価方法として、研修会後の質問紙と各学級担任に対するインタビューを用い、それぞれのデータを複合的に分析した。

全4回の研修を通して、参加した12名の担任教師全員に、「指導性と援助性のバランスの重要性を自覚」、「児童がどう思っているかをより考えるようになった」という指導観の変容が見られた。また、「自発的に行動する児童の増加」など、学級の様子に前向きな変化が見られた学級も多くあった。

これらのことから、R-PDCA サイクルの考え方に基いた全4回の研修会は、各担任教師の意識、行動変容の一助となる活動であり、結果的に学級の様子の前向きな変化につながったことが推察され、学級経営における R-PDCA サイクルの必要性を示していると考えられる。

5. 主な参考文献

白松賢（2017）学級経営の教科書,東洋館出版,東京
文部科学省（2017）教職課程コアカリキュラム